講義名　文学７　日本語のことば

―和語と漢語―

2008.04.17 更新

先入観を去って日本語を端から端まで探索してみると、様々なのことが見えてくる。だが、実際にそれを真っ向から取り組む人はそんなにはいないらしい。素朴な日本人の日本語のことばについての疑問を書き出してみよう。

1．なぜ、表記をするとき「てふてふ【蝶々】」「何々でせう（しょ）」「クワンノン【觀音】」「こゑ【声】」「ゑびすや【恵比須屋】」「ゐど【井戸】」「をとめ【少女】」などと書くのでしょうか。

2．なぜ、全国に同じ地名が数十あるのでしょうか。例えば、「はしもと」「うさ」「うえた」「くりた」「つるまき」「やはず」「とよた」「さかもと」「うめだ」「かも」など。

3．なぜ、「まくら言葉」などという分類があるのか。誰が分類したのか。「あしひき」「たらちね」「あおによし」「ひさかた」とは、本当は何のことでしょうか。

4．「方言」とは、何なのでしょうか。実際の日本各地のことばで熊本の方言「しぇからしか」、会津の方言「ねばす」とはどんな意味なのでしょうか。

5．次の日本語は、本当に音を表現したことばなのでしょうか。例えば、「雨がじとじと」「わんわんと泣く」「ぐっすりと眠る」「きょときょとする」「サクサクする」「まざまざと見る」　など……と。

大方、国語辞書風に五十音順にことばを整理して考えてみた。それは、この１から５を大まじめに考えてきたそのものであった。とはいえ、机上に真剣に向き合って本の虫になって洗いざらい目を通していった状況を描かないで欲しい。現実は非なり、ワイングラスに赤ワインを程よく注ぎ、程よい感覚で口に運びつつも思い付くままにメモ取りしたものだ。これを日々三百六十五日続けていく。将に、「言葉の泉」を運営する私は日本言語文化を雑学する一人なのである。発想は止めどもなく、まるで、泉の水が湧き出すかのように滾々とわき出してきた。天から雨が降るのはごく自然だが、天から豆や五穀が降ってきたという椿事の如くであった。

だが、これだけではまだまだ説明不足である。自称「ことばの手探り人」である私は、人がある音にある意味付けをし、次にこれを別のことばにして表現する。現実との突き合わせ、その照合が済むと、ここにその称号をつけて用いる、つまり、日本語ということばのパズル合わせを組み立て行こうとするのだが、根氣力と集中力が何よりもものを言う世界でもある。時には今日はここで行き止まりなんて日もある。引き返す、後戻り、軍隊用語では撤退を余儀なくされる。でも、無理矢理突進し続けて、底なし沼ずるずると引き込まれるよりは、こうした行為は見極めが肝腎であることをここで伝えておきたい。「オン！」「ノン！」のかけ声で、進む道は自ずと決まっていく。

「X…」のことば

一つだけ例を揚げてみよう。それは、和語「くすね・る」ということば表現についてである。ことごとく解釈し埋め尽くした、解明したと思っていた。しかし、どのような意味を当て嵌めても、このことばには幾つか該当しないことば表現がある。

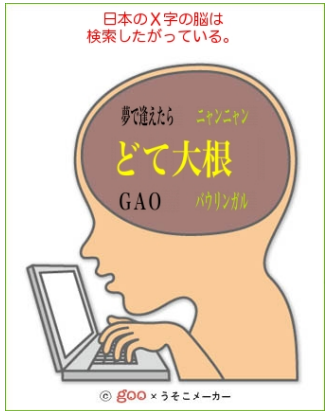
最後に、「Xねる」と書いてみた。ふ～むふ～む。ついでに、「Xの木」「Xぐる」「Xげる(三河の方言で〝刺す〟)」「Xぶる」「Xむ」と順にメモ書きしてみる。やがて、おもしろい！と一人納得してうなずく。「XAい」「XAす」「XI(串・櫛)」「XE(くせ)」「XO(糞)」と、とめどもなく〝ことばの溜池〟に選択しながら注ぎ込まれていく。

宝物を無人島に隠した海賊は、島の地図に「X印」を付けた。盗賊の首領はアリババの家の扉に「X印」を付けて後日の頼りとした。いずれも「後日」のための用意にした記憶方法だった。或る者は、財布を拾ったがこれを隠し、やはり「X印」を付けた。この「X印」を付けることを、最初に「くすねた」と呼んでいたのである。もちろん、「後日」に来た時のための記憶保持のためだ。拾った財布を届けに行く途中の場面では、まだ「くすねた」とは云わない。

「くすのき」は、今の関東圏より以西の国に位置する人にとっては大切な樹木であった。村人がいつも道しるべの目印として使うための高い樹木なのである。たまたま、古代の日本では目立つ樹木が使われたに過ぎないが、やがてその樹木が漢字で「木偏に南」と書いて「楠」の字として使われてきた。でもこれも立派な和語「奇(くす)しき木」という語

を以てその樹木の名とした。人の名前では、「楠木正成(くすのきまさしげ)」は知らぬ人はいない、如何…。

「串」は「竹串」でもわかるように、先の尖った方をもってある物体のなかを通過させて移動する。「X点への行動」を意味する。手段を選ばないでという概念があとで付加されたことばなのである。「くせ事」とは、「指定した事」の意味を持つ符牒字である。英語表示の「TAXI」「TXT」も「X」と同じ音であり、同じ意味なのは、「X」の音が、その意味と共に南蠻船の時代に「キリストの教え」とともに日本へ伝来したことに由来するからであろうか。日本に於ける最も古い「×」「XΧ」の文字は、いつ頃から用いられているのかが俄然氣になりだすのである。そこで、氣づいた一つとして挙げるのが次の事例であった。



近年、沖縄県に超古代絵文字が書かれている、ロゼッタストーン〔http://www.wonder-okinawa.jp/024/japanese/moji/rozetta/index.html〕が琉球大学教授　木村政昭／資料提供〔http://www.bihou.com/iseki/etc/etc-3.htm〕や与那国海底資源調査検討委員会〔http://www.ocvb.or.jp/html/yonaguni/05b.html〕によって報告されている。報告によれば、「約一万年前に、ここに大規模な石造建築文化が存在したことによって、人類の文明史は大きく書き換えられることになろう」といった代物である。

「奇しくも」その場所でばったり会う、これも「X」地点での出来事である。

「くさい」には「臭い」と「あいつがクサイ」の二つの意味があるが、「クサイ」の方が古いことば表現なである。すなわち、「X地点に危険あり」の意味となる。「臭い」も同じだが、やや変化して「危険を感知した」というような意味になっている。だが「X地点」という概念は、まだ十分に残っていることはおわかりであろう。そこが匂いの「発生の源」と考えるからなのだ。

「くさる」も二つの意味を持つことば表現である。「腐る」と「クサる(がっかりする)」だ。前者は、ずばり「X地点は危険」だが、「クサる」はわかりにくい。だがこの言葉は「X地点が危険」であった事を、後悔している場合、及び将来「X地点に危険」があることが予測できる場合に使われるのである。ここでの「X地点」とは「その時」「その時点」の意味となっている。

「くそ」とは何だろうか。古代の日本人が道を歩いてくる子どもに向かって父親が声をかける。「その地点に個体あり！」。これが「くそ！」という注意の言葉なのである。見ると「X地点」には、堕とされて間もないほやほやの「糞」が落ちている。だが、「何くそ！」の「くそ」は「糞」ではない。「その地点に個体・区域あり」つまり、それが目標・目的なのだ。その個体・区域は「ゴール」「埋蔵物」「完成品」「山頂」「敵陣」「終点」などにもなる。

ここで国語辞典に目をむけて見ると、小学館『日本国語大辞典』第二版の記載内容に「ほくそ笑む」の語があり、「ほくそ」ということばには当該の漢字を当ててないことに気づいた。そこはそれ、編者は何か問題があるからこうしたのであろう。だが、補注部分には、「ほくそ」ということばの言われを説明している。大半の国語辞典には「北叟」すなわち、意味は「北の老人」をもって記述する解釈があって穏当のようだが、これはまだ決め手が得られていないことばであり、正しく、「X」の概念を持つ「ほX笑む」ともとれるのである。このことばを用いたもので一番うってつけな言い回しとしてはハートフルSFコメディ『まほろまてぃっく』の第三巻に、「おっぱっぱーのおっぱぱ！ママのおっぱい、ぱよっぱよ」声も高らかにご機嫌なまほろさん。その訳は、おっぱいを大きく出来るという“パイデール・アルファ”なる機械を手に入れた為だった。夜な夜なその機械を試しては、ほくそ笑むまほろさん。しかしある日、そのことを式条先生に知られて大騒ぎになる。異変に気付いて二人のいる部屋に入ってきた優たちだが、過って機械のノズルが胸に吸い付いてしまい・・・「うぉおおお！」という場面がある。

「ほ／くそ・えむ」と区切る和語「ほくそ」の膠着語という見方は余り一般的でないようだ。むしろ、漢語「ホクソウ【北叟】」の説を認定する傾向にある。とはいえ、こちらは少数派ではあるが、「X地点にその個体あり」という概念にぴッたりと合うことから、「ほ」は驚きの感嘆詞「ほぉ！」の縮まった語で、「くそ」と云う個体を意識することばであるとする説も捨て去れないのである。

※小学館『日本国語大辞典』第二版「ほくそえむ」を繙くと、

ほくそ-え・む［…ゑむ］【―笑】〔自マ五（四）〕控えめにかすかに笑う。満足そうにほほえむ。また、一人悦に入って笑う。ほくそわらう。＊源平盛衰記〔１４Ｃ前〕一九・文覚入定京上事「文覚ほくそ咲て」＊読本・椿説弓張月〔１８０７～１１〕後・二九回「幸あり幸ありとほくそ笑て」＊或る女〔１９１９〕〈有島武郎〉後・三六「それを葉子は眼に見るやうに想像しながら悪戯者らしくほくそ笑んだ」【補注】「ほくそ」は、北叟すなわち塞翁のことで、「塞翁が馬」の故事のように世の無常を達観し、喜憂・善悪いずれにつけても少し笑う「北叟笑い」からとする説〔妻鏡・塵嚢鈔〕があり、「北叟」の字をあてる。→ほくそわらい。【発音】［エ］［０］【辞書】ヘボン

ここで、日本語の「X」音字の意味をまとめてみよう。

「くさ【ＸＡ】」――X地点に危険・事件あり。「草」「種・墓・毛」

「くし【ＸＩ】」――X地点への行動（甲意）。

――X地点にとどまる（乙意）。乙意の例は「串」「櫛」。

「くす【ＸＵ】」――X地点は判断不能。例は、「くす・む【燻】」「くすり【薬】」。

「くせ【ＸＥ】」――X地点は情報不足。

例は「癖（くせ）（なぜかいつもの場所に……）。「曲者（くせもの）（どこから侵入したのか不明）」。乙意（X地点に情報あり）の例としては、裁縫の時に目印として付ける「くせ」がある。

「くそ【ＸＯ】」――X地点に個体あり。「甲のＯ」は「指定区域」

「乙のＯ」は「指定外区域」であるから、乙意の「くそ【ＸＯ】」という概念は存在し得ないのである。「くそ【通】【糞】」

「X印」をある目印に使うのは、古今東西にわたる人類共通の固定習慣なのである。日本に独自の「ペケじるし・バツじるし」を使う文化があっても不思議ではない。だが「クス」という発音が西洋と日本で、それぞれ独自に発生したものであろうか。和語と漢語とを見極めにくいことばとして、この「ほくそえむ」をここに紹介した。

※『日本国語大辞典』第二版所載「くす・む」の初出例は、『**大般若経字抄**』〔一〇三二年〕に「黐（クスム）」の語である。次の漢字表記例としては、石川啄木『病院の窓』〔一九〇八年〕に「顔は忽ち燻んで、喉がセラセラする程胸が苛立つ」の「燻」字が見える。

※『日本国語大辞典』第二版所載「ぺけ」と「ばつ」

ぺケ〔名〕（語源については未詳）（形動）拒否、拒絶するさまにいう語。だめ。いけない。気にいらぬ。また、役に立たないこと。間の抜けていること。また、そのさま。＊歌舞伎・八幡祭小望月賑（縮屋新助）〔一八六〇〕四幕「『それでは、情人（いろ）だといった新助は』『少しぺけさね』」＊安愚楽鍋〔一八七一～七二〕〈仮名垣魯文〉二・下「相談のできかかったきゃくにぺケにされたり」＊開化の入口

〔一八七三〜七四〕〈横河秋濤〉四「病気ある者は皆除（ペケ）の口で御用には立たくても迚もいけない」＊海に生くる人々〔一九二六〕〈葉山嘉樹〉二六「ゴム長靴のペケを利用して」（駄目の意で）ばつじるし。×の印。ばってん。盗人、また、てきや仲間の隠語。娼妓。売春婦。〔隠語輯覧〔一九一五〕〕（「べけ」とも）外国人。〔隠語輯覧〔一九一五〕・特殊語百科辞典〔一九三一〕〕（「べけ」とも）雨天。〔隠語輯覧〔一九一五〕・特殊語百科辞典〔一九三一〕〕【方言】拒絶するさまにいう語。だめ。いけない。《ペケ》山形市周辺 139 茨城県稲敷郡 193 群馬県勢多郡「あいつはペけだ」236 佐波郡 242 千葉県印旛郡「約束がペけになった」274 新潟県佐渡「ペけくう（断られる）」352 福井県敦賀郡 443 岐阜市 498 静岡県志太郡 535 和歌山県 690 岡山県児島郡 763 山口県 803 順番の最後。びり。《ペケ》栃木県 198 島根県簸川郡 724《ぽけ》栃木県足利市 198【語源説】マレー語 pergi の転訛〔外来語の話＝新村出・大言海・ことばの事典＝日置昌一・上方語源辞典＝前田勇〕。中国語の「不可（puko）」の訛〔ことばの事典＝日置昌一・すらんぐ＝暉峻康隆・外来語辞典＝楳垣実〕。【発音】〔ペ〕〔ペ〕【辞書】言海

ばつ〔名〕（「ばってん（罰点）」からできた語か）誤り・不可・否定の意や、伏せ字などを示す「×」のしるし。ぺけ。【発音】〔バ〕

ここに見る限り、二つの呼称「ぺけ」と「ばつ」の語ともに、古語には見出せない言い回しである。この「X」印を古代の人々は、では、何と名付けていたのであろうか。「くす」……?。まだまだ続く解き明かしの世界でもあるが、余り深入りすると本統に底なし沼から抜け出せなくなるので、ここらで留め置くことにする。